（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	大形　綾
論文題目	ハンナ・アーレントとニューヨーク知識人の知的交流史		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、２０世紀を代表する政治思想家ハンナ・アーレントと「ニューヨーク知識人」と呼ばれる一群の人々の関係を、『全体主義の起源』（１９５１）の出版から『エルサレムのアイヒマン』（１９６３）の刊行によって両者が決裂するに至るまでを中心に、「知的交流史」という視点で捉えたものである。本論文は、従来、ドイツ哲学とヨーロッパ的教養を背景とする思想家として理解されてきたアーレントを、彼女がアメリカ合衆国で獲得したものにも力点を置いて考察するとともに、彼女がニューヨーク知識人に与えた影響を確認することによって、双方向的な視点で両者の知的交流史を把握しているところにその特徴がある。

「はじめに」では、これまでの内外のアーレント研究史を振り返り、アーレントとアメリカ社会の結びつきという問題がいまだ十分に解明されていない課題としてあることを提示し、論文の構成について説明している。

第一章「邂逅――冷戦と全体主義」は、アーレントの『全体主義の起源』がニューヨーク知識人たちに強いインパクトを与えたことを確認するために、第二次世界大戦に対する両者の関わりかたの大きな違いを指摘するところから始まっている。アーレントがドイツからの亡命者として自らの難民体験を背景に第二次世界大戦の動向に強い関心を抱いていたのに対して、ニューヨーク知識人は対岸の火事として見ていた。そして、戦後ニューヨーク知識人は「冷戦リベラリズム」という政治姿勢を取ることになるが、その際、彼らに大きな影響を与えたのがアーレントの『全体主義の起源』だった。本章では、そのことを確認し、とくに『全体主義の起源』初版の最終章「結びのことば」がソ連の収容所の解放に向けた強い訴えであったことを指摘しつつ、ニューヨーク知識人の受けたインパクトの理由を考察している。

第二章「文化とは何か――キッチュ、芸術、大衆文化」では、逆にアーレントがニューヨーク知識人から受けた影響を確認するために、アーレントの論考「文化の危機」に着目している。元来この論考が合衆国において英語でなされた講演「社会と文化」とドイツにおいてドイツ語でなされた講演「文化と政治」の二つから構成されていることを確認し、そこにドイツの知識人のみならずニューヨーク知識人たちの大衆文化論が組み込まれていることを指摘している。さらに、ニューヨーク知識人のひとりメアリー・マッカーシーとの往復書簡等を検討することで、この論考には、アーレントがニューヨーク知識人から受けた影響とともに、彼らに対する批判的な視座も盛り込まれていることが考察されている。

第三章「アーレントのアメリカ――その光と影」では、人種統合をめぐるアーレントの論考「リトルロックについての省察」が主題的に論じられている。ニューヨーク知識人をはじめリベラルなひとびとからの厳しい批判にさらされた論考だが、その掲載誌が当初予定されていた『コメンタリー』から『ディセント』に変更された背景を確認しながら、アーレントがこの論考を執筆する大きな契機となった『ニューヨーク・タイムズ』の写真について種々の論者の見解を比較し、アーレントが記憶のなかで写真のキャプションを取り違えていた可能性をほぼ確定的に指摘している。また、アーレントが批判に対して唯一自分の非を認めた相手である作家ラルフ・エリスンへの応答を考察することで、アフリカ系アメリカ人の伝統のなかの「犠牲の理念」に対する理解不足を、アーレントが自覚したことを考察している。

第四章「決裂――ユダヤ性をめぐって」では、『エルサレムのアイヒマン』の出版によって、アーレントがニューヨーク知識人と決裂するにいたる過程が主題的に論じられている。アーレントが雑誌『ニューヨーカー』の特派員としてエルサレムに派遣される経緯、ニューヨーク知識人を中心とした『エルサレムのアイヒマン』をテーマとした公開討論会の模様、種々のメディアに掲載された激烈な批判が詳細に論じられるとともに、その背景として、初出掲載誌『ニューヨーカー』の位置が確認されている。最終的に、ニューヨーク知識人と決別することによって、真の意味で「パーリア」ないしは「アウトサイダー」となったアーレントの姿が指摘されている。

「おわりに」では、本論文において『革命について』を主題的に論じなかった理由を説明し、メアリー・マッカーシーが抱いていたアーレントについてのイメージが、この論文をつうじて考察されてきたアーレント像と重ねられている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

２０世紀を代表する政治思想家ハンナ・アーレントと「ニューヨーク知識人」と呼ばれる一群の人々の関係を、『全体主義の起源』（１９５１）の出版から『エルサレムのアイヒマン』（１９６３）の刊行によって両者が決裂するに至るまでを中心に、「知的交流史」という視点で捉えた本学位申請論文は、主として二つの優れた特徴を有している。一つは、ドイツ哲学とヨーロッパ的教養を背景とする思想家として理解されてきたアーレントを、彼女がアメリカ合衆国で獲得したものにも力点を置いて考察していること、もう一つは、彼女がニューヨーク知識人に与えた影響を確認していることである。さらに、この二つの観点を重ね合わせることによって双方向的な視点で描き出されている両者の交流史に、本論文の大きな成果を認めることができる。

「はじめに」における内外のアーレント研究史の確認は的確であり、アーレントとアメリカ社会との関連がいまだ未解決の課題としてあることを、説得力をもって示している。

第一章「邂逅――冷戦と全体主義」は、アーレントの『全体主義の起源』がニューヨーク知識人たちに強いインパクトを与えた背景を、両者の第二次世界大戦との関わりにまで遡って確認しているところ、また、ニューヨーク知識人が戦後取ることになった「冷戦リベラリズム」という姿勢と『全体主義の起源』の繋がりの意味を、とくに同書初版の「結びのことば」に強い光をあてることで解き明かしているところに、本論文の優れた視点を見ることができる。初版の「結びのことば」はそれ以降のドイツ語版、英語の改定版では別の原稿に差し替えられたため、アーレントが初版刊行の時点でソ連の収容所の解放を強く訴えていた事実は、見えにくい問題となっていた。その点をニューヨーク知識人との関係をつうじて掘り起こしていることは、本論文の成果と呼べる。

第二章「文化とは何か――キッチュ、芸術、大衆文化」では、アーレントの論考「文化の危機」に着目することで、アーレントがニューヨーク知識人たちの大衆文化をめぐる議論に影響されながら、ヨーロッパでのキッチュをめぐる議論を合衆国であらためて問い直していた点を明らかにしている。その際、元来この論考が合衆国において英語でなされた講演「社会と文化」とドイツにおいてドイツ語でなされた講演「文化と政治」の二つから構成されていることを本論文が確認している点は重要である。さらに、ニューヨーク知識人のひとりメアリー・マッカーシーとの往復書簡等を検討することで、この論考にアーレントがニューヨーク知識人から受けた影響とともに、彼らに対する批判的な視座も盛り込まれていることを考察していることも高く評価できる。

第三章「アーレントのアメリカ――その光と影」では、批判的に論じられることの多いアーレントの論考「リトルロックについての省察」を主題的に取り上げ、いくつかの問題を明確にしている点が優れている。とくに、アーレントがこの論考を執筆する大きな契機となった『ニューヨーク・タイムズ』の写真について種々の論者の見解を比較し、アーレントが記憶のなかで写真のキャプションを取り違えていた可能性をほぼ確定的に指摘しているところが重要である。また、作家ラルフ・エリスンへの応答を考察することで、アフリカ系アメリカ人の伝統のなかの「犠牲の理念」に対する理解不足をアーレントが自覚したことを指摘しているのも、卓見と言えよう。

第四章「決裂――ユダヤ性をめぐって」では、『エルサレムのアイヒマン』の出版によって、アーレントがニューヨーク知識人と決裂するにいたる過程を主題的に論じているが、その際、ニューヨーク知識人を中心とした『エルサレムのアイヒマン』をテーマとした公開討論会の模様、種々のメディアに掲載された激烈な批判を詳細に考

察している。その背景として、初出掲載誌『ニューヨーカー』の社会的・政治的位置を確認している点、また、最終的に、ニューヨーク知識人と決別することによって真の意味で「パーリア」ないしは「アウトサイダー」となったアーレントの姿を考察している点も評価されよう。

「おわりに」では、『革命について』を主題的に論じなかった理由を説明するとともに、メアリー・マッカーシーが抱いていたアーレントについてのイメージを、この論文をつうじて考察されてきたアーレント像と重ねることで、従来とは異なったアーレント像を提示することに成功している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和３年１月２１日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降